WASON
HQ
1104
J74+

THE WOMAN'S MAGAZINE

Aug. 1
1887
No. 71

明治二十年八月十三日刊行

毎土曜日發兌
一冊正價五錢
府內無郵送税

女學雜誌

第七十一號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 71. August 13th, 1887.

第七十一號

EDITORIAL:—Two Ways of Promoting the Woman's Right: No. II.

LEADING ARTICLES:—On the Western Style of Hair Dressing, by Mrs. T. Nakashima; Woman and Hygine, by Dr. K. Takagi.

MISCELLANIES:—A Virtuous Woman (Concluded): The Boarding School for Girls.

CRITICAL NOTES:—"The Womanhood" (Jotoku Shinsetsu) translated by Mrs. K. Yajima.

BIOGRAPHIES:—Hugo Grotius and the Book Case: No. II; Mrs. Atomi Kakei.

NOVEL:—"The Fragrant Roose;" No. IV.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

ADVERTISEMENTS.

●社說　女權伸張に表裏の二途あり　第二　裏面より之を主張する事

●論說　女子と衞生の五（高木兼寛述）○束髮の事（中島俊子）

●叢話　賢女の德義○女學校の寄宿舍

●批評　矢島錦藏氏譯述斯氏女德新說を評す

●佳傳　跡見花蹊女史の傳幷肖像○グローシアス夫人夫を救ひたる事（其二）

●小說　薔薇の香第五回（月のやまのぶ）

●寄書　隅田川に掉さす長歌（ゆり香）○倫敦タイムス新聞日本女服改良論（高根虎松）

●新報　件名　●特別廣告　婦人矯風會々員姓名

●笑ひ草

○英京ロンドンのある町に一人の貴婦人あり財産は非常に有すれども性至て吝なり此の貴婦人常に胃病を患ふ貴婦人は何とぞして無料にて醫師を頼み度きものと種々と工風をめぐらせりある時胃の痛み堪へがたきにより公園なりと散歩せば快くなりもやせんと人通り多き街道を歩み公園へと趣きけるが途中兼て相知れる醫師に計らずも遭遇せり貴婦人は一計を思ひ付き途中に立ち乍ら診察を請へば別に禮金をおくるにも及ぶまじとてやがて醫師の傍らに歩み寄り胃病診察を請ひ度き旨申しけるに醫師は心地よく承知なし先づ舌を拜見致し度し目を塞ぎ上を向き賜へ今少し仰むき賜へもそつと口を大きくあけ賜へ十分に舌をば出し賜へと言へば貴婦人は無料の診察なりと思ふが故に醫師の請ふがまゝに目を塞ぎ大口をあき空を仰ぎ舌を出して居たりける往來の人々は貴婦人の躰を見てみな〱笑ひ囃しける音にフト目を開けば醫師は居らず多くの人々が己れを取巻き居るを見てあきれ果てさすがの貴婦人も面を赤めて退きけるがこれより此の婦人は己れの吝なるを大に悔ひたれども舌出婦人の名は倫敦市中に響きけるとなん。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第七十一號　明治二十年八月十三日

●社說

○女權伸張に表裏の二途あり

第二　裏面より之を主張する事

活潑有爲の婦人方茲に一つの會を起し演說談論して女子投票權の政府に許されんことを主張し或は委員を四方各國に派出して輿論の注意を惹き若くは一二の女丈夫出で丶驚天動地の偉業を建て若くは一枝の筆を揮つて女性の學才決して有髯男子に劣るなきを示し或は自ら法學士代言人となり或は自ら政治兵馬の權を握り或は世上の職工社會に出で丶男子と競爭するなんど惣じて男々しげなる處置を爲して以て地に塗れたる女權を擴張する事是れ即ち世人が云ふ所の女權伸張論なるものなり然るに如此き處置は只だ是れ女權伸張策中の一部分にして云はゞ其の表面外側に現はれたる活潑の一手段とし見るべし之にて事既に畢れりと思ふは大なる誤なりと云へる事畧ぼ前回に於て其所以を說明したり。

思ふに此表面の一方法は固より女權を伸張するに當りて有効有益なるものにハ相違なしと雖も其事たる普通一般の女方が得て行ふべきものにあらず盖し數百万人の女流中たゞ其一二人が漸くにして行ひ得べき所の方法なるが故に其餘多數の女方は將た何如にかして此の目的を達し得べきやと云ふに是れ即ち更に靜かなる更に穩かなる而も更らに普通なる所の一個の方法を併せ行ふの外なるべからず即ち吾人が裏面內側の伸張策と云へるものにて世の所云る伸張論者が多く輕々に見去るにも關らず其効益の甚だ莫大なるものなり。

前回にも述べたる如く凡そ女權を擴張するに當りて最も大なる妨害となるべきを何者なりやと云ふに盖し男子の輩が多年の習慣に染つて女性を輕蔑するところの惡むべき感想にてあるべし此感想にして一變せざる以上は女の方々が何如に進歩さるゝとも好し亦た何如ほどの偉業を建てらるゝとも男子が眞心より女流を優待せんとの心を引起すは思の外に少きものなり、之は必竟人間の僻として誰にも負惜みの氣性を存しまた人の進歩出世を左程に喜びとせざるよりの根性を懷くより起ことなれば慷慨するとも効なきものなり故に男子をして先づ彼の惡むべき感想を去らせんとには之に反對して議論を仕掛け堂々たる表面の談判を爲さんよりも寧ろ靜かに其心を奪ひ知ず識らざる間に自ら從來の考方の宜しからざりしを愧

づるに至らするを得策とす、若しも此の如くならバ不愉快なからに女流を敬し心中に不平を懐き乍ら女方を尊うとむと云へる如き決果は起らず男子自ら喜んで婦人方を尊敬し今は之が爲めに奔走談論して其權の伸びんことを希ふに至るべし。

人世の事は兎角着物に由て行はるゝものあり何如なる學者才子も襤褸を着ては普通一般の人心を得ること難きが如く眞理明説と雖ども其着物の着樣何如によりて人の心に入ること容易ならぬものなり、彼女權伸張の事のごときは凡て心あらん男子は何人を問はず異議なかるべきものと雖も偖て此の明白なる理論が實際に行はるゝに當りては先その男子の人情に適する如き有樣にて來ると否らざるとに由りて其行はるゝに難易あるものなれば彼の表面より堂々と女權を伸張するは其景況甚だ盛んに見へて而も其結果は思の外に少く裏面より温和しく之を主張するときは景況甚だ微々たるが如く見へて而も其効力の及ぶ所は甚だ廣く且つ大なるものなり。

左らバ所云る其の裏面の方法とは何如なる事か、之を聞かんと欲せらるゝ方々は聞て而して其方法の新奇ならざるを驚かるべし然れども世上の女權伸張論者と云へる方々が此の一法を輕々に見過さるゝを以て反つて吾人の驚となさゞるを得ず抑も其法たる何如ん、曰く、良き妻となり良き母となりて女子の勢力を夫若くは子供等の上に及ぼし此の夫若くは子供等をして鋭意熱心に女權伸張の事に盡力せしむるの策にして兵法に之を、糧を敵に借ると云ひ或は城に入て其將を服すと云ふ卽ち裏面に在て麈を揮り內側に入て其寶を奪ふものなり惣じて俗世界の戰爭には此の手段を以て尤も賢こきこととなし凡そ平和和樂を重しとする男女間の取扱ひには此謀畧を以て善の善なるものとなすなり。

蓋し妻にして若し能く夫に仕へん歟、良人の幸福一に此の細君の掌中に在るべし、凡そ男子は世間に出でゝ數多の不幸に遇ひ多く失望落膽して家に歸るものなり、然るに此時家內よく治つて樂しきこと天國の如く裝飾行屆いて愉快なること樂園の如くんば彼の失望落膽は乍ちにして慰めを得幸福立どころに來る其幸や一に細君の手に依て生ずるものなり、又男子は元來粗大の考に富みて細密の注意には乏しきものなり故に何事を爲すにも頓と氣付かずして落度を釀すことあり英雄多く些事によりて失敗を蒙るは之が爲なり、然に此際內に用心深き細君の注意を受て心付なく箇條を何かと諫められんには男子事に臨みて過まち少なく事大抵成就す其成効や多く細君の手

に依て來るものと云ふべし果して如此ならば良人は此の妻なるによりて始て其樂をも得また其事業をも成すなり其幸福は一に細君あるが爲に起るものと知らバ此の良人は必ず能く細君を敬愛し啻に之を自身と同等に見做すのみかハ延いて世の女流惣躰を敬愛し世に苟くも女方を輕蔑するものありと認めなバ必ず慷慨奮起し之を責めて容謝せざるべしジヨンスチウアートミルを初として凡そ女流の爲に熱心其權を伸張せんとを希圖したる者過半は必ず其家に良妻ありて平生よく之が眞心を動したればあるべし」良妻と爲つて夫を化し以て裏面より女權を擴張するとは即ち是れ也。

次に良き母と爲つて其權を張るも亦た之に同じ母にして能く其兒を敎へん歟其兒の男子は悉く是れ一生を女流の爲に代言するものとなすべし。或は長じて大統領と爲らんか之は一に我が母敎育の恩に由ると云つて則ち先づ女性を禮拜すべし或は事に臨み果斷勇進毫も遠慮せざる歟其氣節は悉く是れ我母平生の訓導に由ると云つて則ち遥かに先妣の徳を謝すべし或は聖賢と爲つて世上の道徳を先導し道の爲に義を盡して斃ひなきもの一に我母機を斷つの敎に由ると云つて則ち遠く母氏の恩に感ずべし或は淸潔高尙の徳を得或は熱心我を食ふの信仰を受たるもの或ひは字を知り學に達するの力を得たるもの或は民の爲に謀り國の爲に盡すの節義を養たるもの悉く是れ母君家庭の敎育に由ると證して一生の善行を其の母の徳に歸すべし。苟くも如此ならバ女性ハ即ちこの人々の恩人なり尊女の氣性永く其腦中に染みて之を懷ふの念つねに斷ぜず知らず識らず女流惣躰を敬して以て之が爲に女權を伸張し世に若し女方を輕蔑するものありと認めば痛歎苦腦して之を防ぎ毫も力を惜しまざるべし孟子は孔子よりも女を卑しまずワシントンは遂に世界第一の女權國を米洲に建てたり此他凡そ女流の爲に熱心其權を伸張せんことを希圖したるものゝ過半は必ずや幼にして賢母の養育を受け夙に尊女の氣風を生じたるものあるべし」良き母と爲て其兒を化し以て内側より女權を伸張するとは即ち是れ也。

然るに演說談論と政權を執り兵馬の權を握ると驚天動地の偉業を建て巾幗にして濟民の大功を爲すと筆に達すると力に隆んなると惣べて所云る表面活潑々の行を爲すは世上普通の女流に得て望むべきものにあらずと雖も彼の良妻賢母たらんとは同じく是れ不容易の事たるが中に其行ハるゝと反つて難からず女流惣躰の天性に訴へては大に望み得べきものあり故に

女權伸張策の中此の裏面の一法を以て尤も普道に行はるべきものとするなり」然れども女權伸張の二途其の一を廢すべからず女流中或は表面の處置に適するものあり或は裏面の致方の外爲しがたきものあり或は時機の摸樣、土地の景況、等に依りて其一法を行ひ他の方法を廢すべきものあり要するに此の二途を行くの長短は人と時と國とに隨つて大に增減する所ならざるべからざるなり。

●論說

○束髮（特別寄書）

中島俊子

近頃或新聞を讀み或人の談を聞くに歐米人は束髮の我國に流行するを聞き大に嘆して何故日本は從來の優美なる髮を廢して故らに粧ひもなきムクツケナ束髮を學ぶ事にや吾等もこのムクツケナ束髮を廢して日本の優美なる結樣に倣ひ度ものなれど俄かに古來の習慣を變ずる事も如何とて斷行いたさゞるも誠に見も羨しき日本の姿なりき日本の婦女子方も從來の容姿を變し玉はぬ事こそ望ましけれ且日本の婦女子が束髮に爲し玉ふにはすこしも油を用ひ玉はさる由是は衛生に大なる害あり云々と語ふ人もありしとか

成程歐米人の中にも左樣の考ある人もあるならん然しながら優美とか不優美とか云事は必竟流行と不流行とに因るなり流行すれば優美と成り流行せされば不優美となるなり果して流行か優美の觀を來すならば束髮の流行こそ余か望む處なり如何となれば今日は昔日の如く貴重の時間を粧奩の前に費すの時にあらず家の娘としては普通の教育を受けざるべからず人の妻と爲りては子を育し夫を扶くるの務なかるべからず且交際繁き今日となりては中々從來の如き人手を借り多くの時間を費す如き髮は到底爲し得へからさる事なるへし人の見て諺に謂水の垂るゝ程美くしきと羨む如き結びし髮の娘孃妻君の境遇を見るに觀花見物或は饗應の前日先髮洗ひし其翌朝髮結女を呼びすくなくとも二疊敷位は髮結道具をまきちらし人の娘孃なれば母親が後より前よりその格好の善惡を批評して髮結女を困しめ又人の妻君としても儘鏡臺の傍らには煙草盆を控侍婢をして長烟管に火をつけさすとか又煙草を吸ひ玉はさる妻君には夏の日なれば團扇を以て煽がさしむる等は余か時として見るところなり又僕婢もなき家の娘孃妻君は日々人の手を借て梳櫛する能されば五六日乃至七八日に一回櫛る位なれば掃溜の如く風塵を貯ふ等は大して衛生とも優美とも思

はれざるあり
束髪の如き一日一回親ら櫛るには十分間を要すればたれり時々香油を濺くときは他に害あるものを見ざるなり兎に角束髪の流行するは大に賀すべき事なり今又束髪嫌のはなしを聞て如何せんかなど考へ玉ふの婦人方もある由なれば玆に一言して束髪を廢め玉はさらん事を望むものなり

○女子と衛生（其五）

海軍々醫總監　高木兼寛　演述　林茂淳　筆記

モゥ一つ靴に付て云ふことはカヽトを大變に高くこしらへるのが有ることです。足は自然に弓なりになッて居ッて身體の重きをもつものてす。私のカラダは十七貫目ありますが其れをたもッて居のも此の足が弓のやうにあッて居るからです。若しこれが平たくありますとカラダの重みをたもつことがよく出來ませぬ。ツチフマズの無い足は役をしませぬ。これがいヽ加減でこそ足の役をするのです。兎に角カヽトが上ると指の形ちが悪くあります。外國の人などにもカヽトを高くして害の有るのに搆はぬ人が有りますがソンナ眞似をしてはいけませぬ。またフランスなどでは靴のカヽトをその眞ん中に附けさせる人が有りますけれども、カヽトはカヽトの下に附けなければありませぬ。ナンデモ靴をこしらへるには足の形ちにすることヽカヽトの大きいことヽカヽトを高くせぬことヽカヽトを靴のアトにしなければならぬことが肝腎です。フランス婦人の靴を御覧なさい眞ン中にカヽトの附いて居るのが有ります。假令ひ文明國の人がしてもソンナことはお眞似なすッてはいけませぬ。

今度は住居のことに付て述べませう。住居は日本風だと疊を敷いて坐るのです。しかし近傍の支那からズット、エウロッパに至ると腰けるに(皆さんが腰かけてお出でなさる通りに)腰をかけて居ますこれが日本の人間の小さくして弱いに關係が有ます。ドゥ云ふ工合に關係が有かと云ふと誰でも外國の婦人方と一所に腰をかけてお出のときは格別身の高に違ひは無いが、しかし立ッて御覧なさると大層違ひます。これは足が短いからです。夫ゆへに勉て足長にしなければならないです。足長にするにはドゥすればいヽかと云ふに長く坐ッて居るをドンナであらうかアナタ方もサッキから今まで坐ッてお出なすッたら今時分には足がシビレて御困りになりませう。シビレルのはオマンマをたべないときにヒモジイのと同じことです。外國の人は足にヤシナヒが行き届きまするが日本の人は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

生れたときから曲げて居る爲めにヤシナヒが足に行き届きませぬ其れだから小さいのです。殊に日本の婦人の足ハ小さいです。尤も外國の婦人方にも足の短い方も有りませうが平均して見と向ふの人は足の血行を妨げないから足が能く伸ひます。日本の人は足の血行を妨げるから足が短く少さくなつて即ちカタワになつて居ると云ふやうな有樣です。外國に行つた日本の婦人方が着物を注文なさると胴から上はアチラの婦人方と同し位ですが腰から下がヨホド短いです。日本風の住居だとドウしてもさうなります。

また坐ると人が懶惰になるから勢ひ手をパチパチ叩いて「タバコ盆を持ッて來い」と云ふやうになるが我々のやうなナリをして居ると自分で取りに行く方が早いです。若し日本風だと坐蒲團すら人の所に自分で出さぬやうになッて居ります。然るにかう云ふ風で居れバ腰をかけて居て疲れるとあるひて見やうと云ふやうになり自然カラダの發育が充分になります其だから腰をかけるやふにする方が宜しひ。尤も年を取ッた方ハ坐りつけた習はしが有から腰かけでハ不便だと云ふ說も有ませうが腰かけの上に坐ることも出來ますから腰かけにした方がナニカにつけて便利で有ります。

住居ハ大層色々なことに關係が有ります。ソンナラ、ドウするがいゝかと云ふに外國風にすると金がかゝると云ふ說が有るです。これも疊の上に坐ッて居るから貧乏なのでさう思はれるのです。また其れ其だけにして金が餘計かゝるかと云ふと決して餘計にはかゝりませぬ。椅子も立派なものをこしらへれバ金がかゝりますが當前のものならさうかゝるものでハ有ませぬ。外國風の住居ハ金がかゝるやうに多く考へますが決してさう云ふものでハ御坐りませぬ。此の腰かけなどハ幾年前に出來たのか知りませぬが六七年前から使ッて居るので有りませうまだイッまでも使ふことが出來ます。疊なら一年に二度ぐらゐハ表かへをしなければなりませぬが外國でハ石瓦の上に椅子を置くのも有りまた板の上に置くのも有りますが瓦や板などの床ハよく張てさえ置けば燒けさえしなけれバイツまでもゝちて居られます。

全國の戶數大凡七百三十萬軒として一軒に疊一枚平均として七百三十萬枚其代價一枚ごとに平均拾五錢とするも百九萬五千圓以上の疊の表が入ます。これはゴザの代價ですが其の外に床やサシ賃などを積で見ますと大層な金になります。一時に出して居ないからさう見えますまいがこれから家で使ふ金

がイクラと云ふことを書き付けて置くと五十年生きて居つたらドの位にならうか知れませぬ。若し板張りにするとソンナにはかゝりませぬ。敷き物もさうです。色々有りますが通常のなら却てトクです。假令ひ同じにしても疊は人の手間を食ひますからツマリ國の爲に損です。貧乏の手傳ひをする物です。さう云ひますとお氣に入らぬことばかりでお氣障りで有りませうが據ろ無く國の爲めに云ふので有りますからお氣に入らぬこととても已むを得ませぬ。

なほ進まして今度は食物です。（飲物も食物の中にこめて申ませう。）飲物は極純粋の水が一番いゝのです。酒類は色々有りますが先づ宜しく無いです。病氣のときはいゝ塲合も有りますが丈夫の人が藥に用ふるとか云ふことは間違で有ります。カラダの爲めに益の無いのみならず害の有るのが澤山ります。年の若いお孃さん方はまだ經驗は有りますまいが御亭主が大酒くらひだとヨホド心配なことが有ります。「ウチの人は平常は誠にいゝ人ですが酒の上が惡くて困ります」と云ふことは屢々聞ことです。若人が酒と云ふのを飮まなくなると酒の上と云ふことが無くなるだけよう御坐んす。私も酒を飮ましたが酒を飮んだ上にしたことは自分の爲めにもならず他人の爲めにもならず社會の爲めに害になるです。國によると小さいときからビールなどを飮ませるですがアレは惡う御坐います。尤も土地の情況によつていゝ水か無いとか云ふやうなときには已をむ得ませぬが先づいけませぬ。

食物のことは一番重いことだから能くお聽き下されたい。食物のヨイとワルイによつて人のカラダが強くなつたり弱くなツたりします。ヨイものを食へば丈夫になりワルイものなら弱くなります。先きほど皆さんの所へ摺り物を上げておきましたが其れを御覽下さい。アトで斯う云ふ譯になツたのはドウ云ふ譯だと云ふことを申し上ませうこの摺り物に Year と書いて有るのは年で千八百七十八年即ち明治十一年から千八百八十六年即ち昨年の十二月三十一日まで九年間で段々調べやうと思ひましたが初めの方は整はぬから七十八年から八十二年までは分りませぬ。Ratio of cases per 1000 force. と云のは一千人人が有と病氣の數が一年にイクラ出來るかと云ことです。其れが明治十六年は三千二百三十五以上で有ましたが十七年には千八百六十三になり明治十八年には九百九十になり去年になッては五百七十七ですから一年に二人で一度と云やうに減て來たです。十六年には一人で一年中に三度以上病

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Year.	Ratio of cases per 1000 force.	Number of days of treatment.	Average daily number of patients.	Average daily number of patients per 1000 force.	Average duration of each case.	Number of sick days of one men per annum.	Dead.	Ratio of dead per 1000 force.
1886......	577.46	116,287	318.59	37.59	23.76	13.72	63	7.43
1885......	992.48	131,942	361.48	52.25	19.22	19.07	49	7.08
1884......	1,863.70	174,401	476.50	84.45	16.58	30.91	45	7.98
1883......	3,235.44	233,083	638.58	121.15	13.67	44.22	85	15.89
1882......	....	....	....	....	....	....	103	21.59
1881......	....	....	....	....	....	....	81	17.45
1880......	....	....	....	....	....	....	63	12.71
1879......	....	....	....	....	....	...	119	23.42
1878......	....	....	....	....	....	....	56	12.37

Before 1883, other materials except those for dead are deficient, so they are omitted in the table.

氣せしものを十九年には二人で一度とは大變な違でせう。

其れから Number of days of treatment. と云のは藥を飲ました日數で十六年が二十三萬三千〇八十三日、十七年が十七萬四千四百〇一日、十八年が十三萬千九百四十二日、昨年が十一萬六千二百八十七日です。

Average daily number of patients. と云ふのは日々病人がイクラ有ッたかと云ふことです。其れは明治十六年には六百三十八人、十七年には四百七十六人、十八年には三百六十一人昨年は三百十八人で有りました。

Average daily number of patients per 1000 force と云ふのは日々一千人に付てドレだけ病人があつたかと云ふことです。明治十六年には百二十一人、十七年には八十四人、十八年には五十二人、昨年が三十七人で有りましたら前には三人有ッたのが今では一人にもなりませぬ割合です。

Average duration of each case. と云ふのは各病症の經過日數と云ふことです。十六年には十三日で有ッたが十七年には十六日にあり十八年には十九日になり昨年は廿三日になりました。病人の數段々少なくなッたのにドゥ云ふ譯で經過日數が餘計になッたかと云ふとチョイチョイとした風ひきとか云ふや

うな輕い病氣が少なくなッた爲めです。

Number of sick days of one man per annum.と云ふのは一年の間即ち三百六十五日の間に藥を飲ます病氣の日數と云ふことです明治十六年には四十四日で十七年は三十日、十八年は十九日になり昨年は十三日ばかりですから初めには一月半も藥を飲まなければならなかッたのが今では半月も藥を飲むには及ばなくなりました。

さうして十一年から十九年までの死んだ數が書いて有りますが前の方の dead と書てあります所はアテになりませぬ。後の方に書いて有る Ratio of dead per 1000 force と云ふのは一千人に付死人の數はイクラト云ふことです、十一年には千人に付て十二人、十二年には二十三人、十三年はに十二人、十四年には十七人、十五年には二十一人、十六年には十五人、十七、十八、十九の三年間は千人に付き僅か七人しか死にませぬ。即ち從前の半分ばかりになッて來ました。

これで皆さんお分りで有りませう斯う云ふ工合に病氣をすることが少なくなり又死ぬことが少なくなるのはドゥ云ふ譯かと云ふことを考へて貰はなければならぬです。十一年から十六年までの死亡數は千人に付て十七人イクラと云ふのが十七十八十九の三年間は七人イクラと云ふ樣になりましたから千人に付て九人あまり減りましたのです。千人に九人だと百萬人に九千人だから中々僅かなやうでも大きなものです。東京でも一年中には九千人位違ひます。其九千人違ふと云ふのも重もに食ひ物に氣を付けると付けざるとによります我々は氣を付けて其れを直さなければならぬと云ふ精神です。（未完）

"Every organized being always lives immerred in a Strong solution of it's own elements." Dr. Holmes.

●叢話

○賢女の德義（其三）

古へより婦人の失德を云ふもの常に言語を愼まざるを以て其の最も怖るべきものとせり家語に曰く終身善爲一言則敗之可不愼乎と又或哲き博士の言に曰く病は口より入り禍は口より出と聖經に曰く舌は惡の世界なり舌は百體のうちに備りありて全體を汚し又全世界を燃すなり舌の火は地獄より燃え出箴言に曰く賢女口を啓けば智を以てし其舌には仁愛の法ありとされば婦人の善く注意すべきものは口なり口を用うるの道正しきときは一家の和樂を增し隣友の親睦を厚うし世界の幸福を大いならしむることを得ん言語を愼まず妄りに其の口を用うるときは自らの愧を來す其人の名聲を貶し家を修羅

の巷とし四隣を戰場に變化すること必せり愚なる炊婢の井傍に打寄り由なき事を喋々し裏店の女房長煙管を携へて四隣に金棒を曳き心無き婦人等の集れば痴話に酖り歌舞妓の批評朋友の譏謗に時刻を移し其言ふ所良人や家婢の棚卸に始りて湯屋の三助の風說に終るが如きわ言ふも更なり物識り貌なる夫人が西洋風を氣取りて根も無き理屈を言立て温良謙讓の婦德たるを思はず妄りに進み出るを以て己が分なりと思惟し洋裝の美服肩風を切り其の饒舌の多きは靴の音よりも喧しく噫々文明の婦女洋裝の婦人よ君達は僕等を世界の極に逐ひ遣らんとするか男子も憐れなるものなり暫らく社會の片隅に安住する事を得せしめよ是の如く女子の過多くは口舌の間に在るは西洋も東洋も敢て異なる所なしと雖も殊に我國に於ては女子の智識未だ開けず交際の頻繁ならず其の平生心懸る所の事多からざるより自ら談話の道に暗くして所謂啓くも智を以てする能はざるなり女子の言語をして香ひ薔薇の如く甘き事蜂蜜の若くならしむるの道は何ぞや宜しく女子の運動する世界を廣め社會の事情に通じ智識を練磨し精神を高尙ならしむるに在のみ言語の正きを無學なる婦人に望み會話の樂みを好尙極めて卑き夫人等の口より取んと欲するもまた難ひかな。

昔し人類の始めて出現せるイデンは寒暑の度甚しからず百果耕さずして實り人と萬物と調和して互ひに軋ること無し實に喜樂滿ち歡娛溢るゝの樂園なりき然れども男子一人して居るは宜しからずとて天之に女子の助けを與へたまへり之れをアダム、イブとす況んや現前の世界は荆棘道に橫はり疾苦野に滿ち喘ぐ聲哭く聲は四方に起りて冤を訴へ哀憐を乞ひ求むるの世界なり此れ其の舌に仁愛の法を銘したる賢女の必要なる世界に非ずやされば賢女よ仁愛厚き汝の言語は貧者を慰め究苦の人を救ひ世の中に憂を拂ふ玉帚なり生活の途甚だ嶮岨なりといへども賢女の言は聞くものをして其の精神を爽快ならしめ其の志を堅固ならしむべし西語に曰く婦人は吾輩に遣わされたる天使なりと決して溢美の語に非るなり。

女子の家に在りて負擔する所の義務甚だ重し殊に人の妻となり母となりて之を助け敎ふるの任に當り其下に僕婢をも召し仕へる夫人の義務最も輕からざるなり箴言に曰く賢女は能く家人の道(平生の行狀)を監督して敢て怠惰の餠を食せずと此は夫人家に在りて自ら道德を修め品行を正うし志操を淸潔にし而して後に子女僕婢の行狀に注意し温厚慈惠の敎育を以て之を善良の人たらしむるの大任を負へるを敎へたる文なり其

の意懇切周到なりと謂はざるを得ず我世の夫人等に告ぐ汝の家に召し使はるゝ僕婢を愛して其の道德を養ひ眞正の宗敎に從ふことを得せしめよ就中幼少にして汝か家に傭はれたる僕婢を愛せよ彼等は已が生れたる家庭の住居も成り難く若しくは父母に後れ親戚に棄られて汝の家に來れるものあり初雪やあれも人の子樽ひろひの一句は汝をして斷腸の思を懷かしむるに足れり彼等は家を離れ「ホウム」の感化を失ひ愛情の羈を絕れて宛かも乘捨られし小舟の倚へき所無きに異ならす汝にして若恩愛を以て之を導き厚く親みて之を待遇ずんは身終るまで家庭の敎育無くして過んとす其愛情は嚴冬の雪に壓さるゝ梅蕾の如く汝か眷顧の春風を待ちて開かんと欲するなり彼等は幹より切り放たれし枝の如し汝の家族に接木せられて惠の露を被らずんは溯日之を枯し風霜之を亡ぼすに至らん。

凡そ人の母たるものは己れの子女をして閑散武事の生涯を送らしむ可らす何人にても勞働せす注意せす日々遊び暮すは至つて害あることあり富人の子女最も此に注意せざる可らす譬は如何に堅牢なる大船にても貨物を搭載す船足輕くして大洄に出るときは風浪の爲に覆へされ若くは岩石に打當られて摧くるの憂あり故に貨物無船舶の海に出るや故らに土砂を積て船足を重くするを常とす人生又何ぞ之に異らん徒らに爲す事も無き閑暇無聊の人は甚だ危險ある地位に立ものあり故に賢女は其子女をして無事閑散の有樣に居しめざるを平生の心懸とす本文に賢女の監督する子女は怠惰の餠を食ふことなしと見えたるは蓋し此道理を示めせるものあり。（終）

○女學校の寄宿舍

女學校寄宿舍の管理方は女子敎育の上に於て甚だ困難ある事にて其の可否何如に依りて女生徒を善くも惡しくもするものなり吾人は本誌第五十號に於て少か考ふる所を述べ置たるが時事新報の記者は此頃の新聞紙上に於て女學校の寄宿法宜きを得ざるとにつき一言したり尤の事なれども之は前述する如く不容易あることにて中々口に輕ろ〳〵しく述べ得る程の次第にあらず現に英國の如きにてすら餘程其取締方に困難を覺ゆると聞居りたるが七月廿五日の女皇新聞には當今英國各女學校の寄宿舍に二の弊害あるとを說きて論したり今ま其大意を抄譯すれば云く之に弊害數多あるうちにも大別して其大あるものを擧れば即ち衞生上に不注意なる事及び德育上の處置の宜を得ざる事これあり。先田舍などに住ひて常々新鮮の空氣を吸ひたる者が寄宿舍に入てよりは狹き一室に五六人も雜居し夜は窓を開くとも得ならず僅に烟突より通ふ空氣の往

來によりて新しきを吸ふの次第夜間の惡氣夥しきが如し殊に日に一時間程の運動はあれども家に居りたる時の如く自由に遊び出づるとなければ身躰の弱ると甚しく入浴の度數も少ければ不淨甚し其上脊を曲ると自然に多ければセムシの病自らに起り隨て他の疾病に感ずるとも早し衞生上の弊害少からずと云ふべし云々。寄宿舍内德行の欠點も亦多し兼て定め置ける規則は嚴なりとも之を破りて恥と思はざる女生あり例へば室内にて濫りに飲食すべからずとあらば彼の人間の先祖が禁ぜられたる菓を特更に好みたる如しわざ〳〵人目を竊みて飲食するが如く殆んど女德の榮譽を害し顧みざるに至る或は長上を非り同輩を惡む如き弊なきにあらず是等は取締人にして能く愛と信切との例を示し女生を結んで敬愛の一躰となすが如く勉めなば或はその惡結果を免れ得べしと雖も其は眞に言ひ易くして偖て實際には困難なるものあり夫れのみか十二三歲の女生徒にして既に男子との交際を樂しみとし花カードの類を贈り遣りてなまめきたる玉章などをも往來するに至る眞に驚くべきものと云ふべし」されば女生徒を寄宿舍に入るゝは宜しからぬとにや寧ろ之を兩親の家に止て通學せしむべきかと云ふに之れ亦可ならず斯くは切角の敎育も其効能を及ぼす薄しと云べし故に寄宿舍の改良を行ひ管理を嚴にし右に述べたる如き弊害を成るべく防ぎ止めて以て寄宿より生ずる所の利益を與ふるやうに勉めざる可らず云々

○批評　（第二十七回）

(63) 斯氏女德新説　（中本一册（二百八十頁）定價九十錢 發兌所東京竹川町十三番地共益商社）

此書は英國人シリトー敎師が著したるウーマンフッドを矢島錦藏氏が譯述なりたるものなり此書は元來基督敎に據つて女子の地位を定め一方には男女同權論の亂暴を責め一方には男尊女卑の弊風を矯め婦人をして淑雅優美の德を養はせ乍ら之を高尙嚴格の地に進ませんとを主旨として論述したるものなれば當今女敎の維新に際しては我邦に尤も適當したる女戒たるべしと思はる、譯文は平易を專らとしながら能く流暢を得たるが譯者元來敎の事に慣れざるが故に第一本書の主眼として每章の冒頭に置いたる聖經の辭句を省き尙ほ卷中所々に見ゆる使徒聖賢の名を誤譯し印刷の脫誤も亦た所々に見ゆれども其大躰を云はゞ女學上有効の出版書として之を受けざるべからず讀者は之を購ひ玉ふて宜しかるべしと信ず

女子を主人公としたる小說世界列國の未來並に景山英女の傳は次號に於て批評するとあらん

（女子は男子と同等なり同等なれども異る所あり男女同等にして又異る所あるは人生を完くせんが爲めなり○女子の德は淑女と爲るに在て烈女若くは勇婦となるにあらず（シリトー氏）

●佳傳

○花蹊女史小傳

万里小路桃子和訓

花蹊女史、姓は跡見、名は瀧、攝津國西成郡の人、其父重敬、士族に列す、書史に通じ、詞章に工にして、時に聲あり、女史姓明慧、生て三歲已に群兒と嬉戲せず、惟書畵を好み、偶ま筆を執り揮灑すれば、便ち法度あり、嘗て枯木寒鴉の圖を作る、神致畢く肖はる、父之を奇とし、特に名師を擇み、授くるに八法を以てす、女史偶たま紈扇を書す、字跡娟秀なり、父の友の見る所となる、曰く此れ衞夫人の簪花格なり、精進して已まざれば、當に書を以て當代に名ある可しと、女史之を聞き、心を潜め學を力め、朝夕倦まず、其詣るところ、益極に造る、遠近の閨秀、殆んと與に抗衡する者なし、西京に居こと年あり、名聲轂に聞ゆ、群不櫛才人を以て之を目す咸な曰く班姬蔡女復今に見はると、明治五年壬申春、

始めて東京に來り、書畫の法を以て群弟子に授く、是に於て書畫を習ふ者始めて點畫波磔鉤勒渲染の諸法あるを知れり、當時翕然之を稱す、業を請ふ者、戶外に履滿つ幾んと門限に於て穿をなせり、乙亥の冬、新に女學校を中猿樂坊に築き、大に女敎を興す、生徒絳帷に列せる者常に數百人、裙釵爭ふて字を識るを以て榮とす、一時風尙の趨く所、俗之か爲めに化す、學校中華族貴人多し、西洋女子も亦入學を願ふ、經を執り難を問ひ、彬々禮あり、敎ゆる所は和漢の書籍及ひ書畫歷算針黹纂組となす、其來りて敎を受くる者、容儀貞靜、咸な肅然として大家の風範を具ふ、女史芳齡三十、德言工容、四者具備す、內行既に美に、外儀尤も謹む、日に絲竹の塲壺觴の會に周旋すと雖ども、歌を聞て態益々壯に、容益斂む、故に徒に才を以て女史を稱するは之を失せり、西洋の人其名を仰き、重金を以て畫を求む、女史爲めに四季の花卉を繪き、自から其端に題して曰く、趙昌四季の花卉を畫くを好む、芍藥躑躅寒菊山茶或は梅花黃葵芙蓉山茶を以て數に具ふ、活色生香、紙上に躍然たり、古來寫生の妙、之に過るあるなし、余も亦四季の花卉を畫くとを好む、然れども我邦に在りては、櫻花を以て數に具へざるを得ず、夫れ櫻花は五大洲中絕て無き所たり、之を彼に無くして、而して特に之を我に有す、宜しく若何に貴重珍異すへきや、余今櫻花を以て牡丹紫藤罌粟蜀葵蔦葉山茶に伍す、殊に其芬芳嬋妍にして、諸品の上に出つるを覺ゆるなり、此文小品と雖も、亦所見の卓なるを覘ふ可し、敎部省嘗て徵して訓導となす、女史上表し力めて辭す、宮內省も亦屢徵し見て、恩賜稠疊、時人之を榮とす、明治十六年冬女史大に成蹊館を闢き、其門下の女徒を甄別す、一時試に就く者數百人、期に先だち、女史書を貽り、姚君子梁を迎へ往き觀せしむ、而して折簡にて蒲生君子闇を招き介となす、姚君は余か國使署の隨員、年少にして儁才を負む、東國名流の仰き重する所となる、詩文詞賦、卓然として一家の言をなす、子闇著述甚た富む撰する所の偉人傳、尤も人口に膾炙す、是日女史明裝炫服、館の西窓の下に席し、東面して高坐す、女生徒數十人、翠緋袴を穿ち、右に侍坐す、其他東壁に席し、西面して坐する者若干人、南軒に席し、北面して坐する者若干人、頃くして一少女北房より出て、徐步して前み、白氈を席に布き、又一少女之に隨ひ、桃茢を揮ふ、蓋禳事を行ふなり、既に畢り、神位を北壁に掲け、白木の長几を擡へ、神位の前に置、女徒咸く起ち果蔬魚鳥幣帛を持ち輾轉遞ひに傳へて前に至ると、凡そ數十傳、而して後に之を神位の前の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

几上に進め、然る后祭文を朗誦し、誦し畢りて、二幼女几側に就き、漢書を披き講す、音を吐くと清亮、字を辨すること明晰、一を西村信子と曰ふ、年甫めて九歳、一を丸山節と曰ふ、年甫めて十歳、洵に神童なり、繼て紅氈毯を地に鋪き、生徒數百人、更迭して進む、大筆を濡染し、擘窠の書を作る、字或は人より大なり、龍跳り虎臥し、神彩飛動す、其最も幼にして工なる者、曰く三條富子年九歳、曰く岩崎茂子年八歳、曰く岩崎富子年七歳、子闇の女公子春桂も亦其列に預る、幼にして書を作り能く工なる者曰く三條智惠子年十一、曰く三條西濱子年十二、曰く松野鉄千代年十一、曰く松平丙子年十歳、中一女子淡竹數竿を作る、風姿灑然、神韻獨絶なり、姚君尤も意を屬す、異しんで其名を詢へは、則ち曰く桃子なりと、技を獻し竟り、神羞を徹する、其儀初の如し、館ハ明治八年に創め、今に至り又八年、館の側らを三宜棲とす、女史泉比を擁する處なり、三宜とは月に宜しく雪に宜しく花に宜しきを以て名く。蒲生子闇、嘗て之か記を爲し曰く、斯樓に貴ぶところ、獨り雪月花のみならさるなり、女史の門下、百千の閨秀、佗日薰陶成るあり、其智識瑩然として月の如く、其節操皎然として雪の如く、其藝文爛然として花の如き、是れ則ち三宜の大觀なり、と乃ち子闇今日躬其盛に逢ふを得たり、豈に其言の克く應するに非すや、論者謂ふ、女史の目中餘子なし、而して獨り姚君に心折し、文字を寰中に證し苔岑を海外に契る、斯れ亦奇なり、子闇女史と故と戚誼あり、翰墨往來、殆んど虚日なし、嘗て女史を偉人傳中に數へ、之を表彰すると甚だ力む、是れを以て、四方都て其の名を知る、と云ふ(未完)

○グローシアス夫人夫を救ひたる事　(其二)

然れど夫人が强いて薦むる儘にグローシアスは箱の内に入り身を縮めて之を試るに辛ふして全軀を隱くすに足れり。ヒウゴ、試驗の爲なればいざ蓋を覆ハん何時間耐へらるべきや時計にて計り申せバ苦しき時内より叩き玉へ

斯くて明日も復た試み其次の日も亦た同じ事して驗めし乍ら扨て斷じて之を行ハんとも得せずありけるが既にして三月廿一日となりぬ此日は恰かも日曜日なるに朝まだきより暴風しきりに吹き荒れて雨も亦た强かりしが其間にちとの小止したる時ゴルカムにて搗き鳴らす鐘の音いと明らかに聽えたりグローシアスは娘のコルチリアに聖書の地圖を示し居たるが偶と頭を擧げて此ば亦た何如なる樂しき鐘の音ぞと云ふ夫人は此れぞ大市を開かん前の知らせにとて鳴らすものならんと答

へたるにコルチリアは幼らし氣にも承知顔して明日こそ父様のお出でなさる時にて侍らんダートサレーアの叔母さまが仰しやるに大市のある間は何如なる罪人も皆なゴルカムに參りて遊びまするとグローシアスは娘を膝より下して次の間に入りツと夫人を招きて手を握り乍ら低き聲して、如何に妻わが主は此の幼子の口をもて吾等に示し玉ふならずやと云ふ夫人は急き込みて眞とに左樣にて候はん最早遲疑すべき時あらず其機會の至れる如く思はるゝと答ふ此時突然かなたの戸を開きて獄司デベンター現はれ出でたり。グローシアス殿拙者は此度位を進められたれば一と先づハスデンまで參るべし數日の後ち歸り申せば御身氣付玉へと云ふ、嬉しくも好き事のつゞくものかなと心に祝しつゝ侍女エルシーを窃かに召び近づけて謀事を授づけ翌日此の箱に番してゴルカムまで參りくれよと賴みたるに年少き僻として一時は否みたれども暫くして固く引受け快ちよくも承知したり夫人銳どき眼に涙を浮べて汝は眞に善き女なる哉必ずや後悔すべき事は起らじ謀事悉く成就せんと明かなりとは勵ましたり

扨ても其翌日は暴風尙ほ止まずしてワール河の水量大に增したりグローシアスはリンチルの下着一枚を着て本箱の內に入り大なる聖書を枕として其上に頭を置きたり夫人は數多の軟かなる糸を集めて夫の首の邊に埋め又たリンチル洋紙の類をもて箱のすき間を塞ぎ偖て嚴然として涙をかくし乍ら蓋を覆ひ錠を下して鎖に接吻し之をばエルシーに渡しぬ尙ほグローシアスの脫ぎたる衣服は寐床の傍らなる椅子に懸けて幕を引き寐床をかくして尙ほ眠れるが如く見せかけ偖て兵卒どもを召びて本箱を渡しぬ

兵卒ども本箱を擔いでエルシーに從ひ段を下るに重きこと太甚し、之はまた常よりも重いようなり書物の外に四人が入つて居るのではない乎とつぶやくにぞ此時エルシーは尤もおかし相なる樣をして氣輕に笑ひたり。斯くして第一の危難は免れたれども獄司の妻は夫に化りて尙ほ四方の番に注意し凡そ其の門を出入する品々は悉く精密に吟味するを常例となせば万一此の箱の內の書籍をとて調べられんには万事則ち畢ると思はれたり（未完）

希臘人埃及へ來る埃及の人は云く我國にはナイル河ありて河より水を供するとなるに希臘には雨と露と降りて直に神の恵を蒙る神は希臘にあつく〳〵て埃及に薄しとつぶやきたり然るにナイル河の河上はアビシニアの森林にて天より雨露の滴りて源となれるとを知らざる也

●小說

○薔薇の香

第五回　同胞の愛

月の舍しのぶ

讀かけたる洋書を半ば閉ぢて左手に提さげ椽側に置えたる椅子へ横なりに腰うち掛けて右手を以て右の頬を支へ庭前に鬱乎たる樹木を眺めて連りに物按ずるの風あり眉一直線を畫き乍ら漸次に壓し下がりて間ひに二ッ三ッの皺を示めせば眼光則はち照り渡りて苦腦堪へがたき面色を現ず突然立上りて首を垂れ乍ら前後に數歩の運動を試み板の間より眞理を搜し出さんとの身態を爲せど思はしからぬにや復た元の椅子に立戻つて腰深く椅り懸り一足をもたげて早速の見台に備へ左手を置いて書を開きたり。凡そ讀書の樂に耽りて沈思默考するときは萬物悉く聲なうして只だ我が研究の儘に用達んとするものあれば霹雷迅雨も先づ前腦の指圖を蒙つて後ち耳邊に鳴り渡るが如し況してや最と靜かなる最と優美なる音して我傍らに來らんものは先づ我目前に直立して二三秒間其全躰を示すにあらずば中々に我が眼中には入りがたきものなり。左ればこの時椽側のあなたより密と半面の顏を出しニコ〳〵と笑ひて急に隱れたるが暫時してまた靜やかに面を現はし彼の讀書家に知らせじとて尤も用心して歩み來るもの丶如きは如何にして彼の卷上の樂み手を驚かすに足らん當時こまやかに其の容貌風姿をながめ得たるは即ち吾れ小說家たる人の外はあらざるべし

年は既に十六七にやあるべし顏丸ろくして光澤多く寧ろ赤味を帶びて愛敬あり何處となく樂しげに見えてにこやかなれども偖て其一部分を分拆せば皆なキッとしたる尋常の躰あり笑を口の邊に閉じ込て近づき乍ら彼の讀書家が一心不亂に見つめたる書物の上を急に覆ひ

兄さん

喫驚すべしと待搆へたる妹の顏を見上げ一二秒たちて漸くに笑ひ初めたるが心の臟より押し登す人情段々と滿面に行渡りて顏色則ち一變したる時は兄さんの聲を距ると少くとも四五秒なるへし此に至つて

アヽビックリしたよ

と白狀してヤット妹の苦心を滿足させたり

また何か考えて居らつしやるノ、餘りお詰なさると頭が痛みますよ

アヽ面白ひ、此の處は餘程よく論じてある、ドウモ心理書を

讀む時ほど腦中の閑靜なとはないよ

なにを御覽なすつてるんですか（とちよいと首を傾むけ表紙の横を見ながら）ナゼそんなに閑靜になるものでせう

マー、お前、その議論が眞實かどうかと考へる、之と同時に自分の腦の働きはその様なものかと考へる、此考へる力はどの様にして働くかと考へる、だん／＼に先へ先へと考へ推して行くから自分と云ふものは追々と奥の方へ隱れて仕舞ふて前に廣い腦の舞臺が出來るもの

ホヽヽ好い能舞臺ですねー、そして兄さん此頃でも矢張り時々はお氣が欝しますか

アー、どうも欝してならんよ、然し書物を讀だり何かをする時は別段欝するとも思はないがね、少し勞れて斯う庭なんどを見て居ると草木が私の目に寫つてる斗り何んとも爲ないで自然に頭が重くなつて世の中は、バカ、何者だと思ふように爲るんで困るよ

ソンナ事ばかし仰しやつては眞實にいけませんワ、あのそう云ふ時は運動をなすつたらどうです、きつと善くお成りなさるでせう。私は少し何か考へましても直き外へ出て草木の青々したのなどを見ますと神さまは此様に人の目を喜ばせて下さるんですから況して心の中などで心配をするは無用で罪ですと思付き大變に嬉しうありますワ

お前は善い性質だネー、ソンナに爲つたら樂しひものでせうよ然し人間は皆んな色の違つた目鏡の樣なもので其人々の氣性で万物を觀て種々の方角から神の榮光を測るものだから、お前は樂しい方から御覽なさい私は悲しひ苦しひ方から万物の現象を研究するのだと思へば何んともありません

ソウれ考なさるから惡いんですワ、昔しから大事業を爲すつた方々は皆んなブライトサイド（樂しひ方）を見て喜んで居た人だとか自助論に御座いましたでせう、兄さんはろうお明らめなさるから矢張り喜んで居らつしやるようなものですが何分お欝しなさるとがなくならなければ躰に惡う御座います、キツトいけません、ネ兄さん

ハヽヽそう責められると困るよ、お前いつ學校へお歸りだ

次のマンデー（月曜日）から稽古がありますからどうしませう土曜日に歸りませうか

マー、それじやわ、月曜の一番滊車でお歸りな。學校に好い友達がありますか

ありますとも大へゑんにありますワ、校の先生が始終さう仰しやいますから何日か居らつして少し生徒方と交際なさいましな兄さんのように知らないでくさして斗しお出なさるのは實に失敬ですワ

コリヤー大變だ、僕は女權論者ジヤアないか、くさしどころか何時も婦女子の爲に辨護して居るものでお前達が感謝しなければならん人でせう

議論はろうでしても實際もつと女を重じて下さらなければなりませんワ、此んな眞理は女には分らないなんどと仰しやるとがあるでせう

コレハ降服しました、ダガネ、女の人で衣物の事ばかり注意したり人に見らるゝとのみを喜んだりするのを見ると實に堪へられませんよ嫌やで忌やでなりませんよ

ダツテそんな方ばかしジヤアありませんワ、ホントウニ兄さん少し交際なさいましな、ソースルト第一あなたの御氣分に餘程變はりがありませうし、またキツト好いお友達が出來ますから……ホンニ今晩はあの東京女學の方々が交際會をお開きなさるので招待をして下さいましたから御一所にお出でなさいましな

ア、ソウ〱、お前はあそこの學校に縁故が有のでしたネー私も先達て一寸つと行つて見ましたよ……一番上の級の方々をお前は知つておいでか

一番上ですか……左樣ですネー……去年あの方が卒業なすつたのですから……エ存じて居ます今では大方三人しかありませんでせう

ソウ三人でした何んと仰しやるのですか

エー、白河のお光さんに、波羅お香さんに、内海のお靜さんでせう

ソウですかあの綺麗な着物を着て居る一番美しひ方は何と云ふのです

その方が波羅さんですあの沈着た考の深そうな學者風の人が居らつしたでせうあの方が白河さんです兄さんに能く似てお出でなさいますワ

ソウですかその波羅さんと云ふのは實につまらんジヤアないか衣物の事ばかし裝飾の事ばかり……

またおくさしなさるよマア今夜行つてお話を爲て御覽なさい人は見かけのみでは分りませんよ

此時母親手に一枚の新聞紙を持ち目鏡の上より愛らしき兩眼

をかしやかせ作らにこやかに笑ひつゝ出で來りて
なにをお話して、、、、面白そうに

●寄書

すみた川に月を見て　ゆり香

(一)
こよひハ空も　すみわたり
月さへきよく　風すゞし
いざさをさゝん　すみだ川
ひるのあつさを　あらはゝや

(二)
たまあふとも　むすびあふ
いとにゆかりの　柳はし
そよふく風に　つあときて
大川づらを　こぎのほる

(三)
長くわたせる　かけ橋ハ
夜にあほのこる　虹と見へ
烟とめたる　塔のかけ
ゐ玄のたくみと　あやしまる

(四)
みつまたの江も　はやすきて
跡はしらひげ　行ふねは
こゝろせきやの　さとならで
ことゝふ宿に　つきにけり

(五)
夏をわするゝ　水のおも
流しづかに　鏡なし
きしの木影も　月かげも
うつるこよひぞ　をしまるゝ

(六)
やへのうしほの　ひくまゝに
月もろともに　行く舟ハ
あめの海路に　雲の涙
分けつゝのほる　心地せり

(七)
ともとちともに　このゆふべ
子瞻がむかし　おもひいで
やまとからうた　うたひつゝ
ふるへりうちて　興じけり

(八)
かゝるゆふべハ　またあらん
月のひかりハ　むかしより
たえぬど人ハ　つねぞなき
おもへハをしき　このあそび

○倫敦タイムス日本女服改良の論

英國内閣總理大臣Oxford大學総長ソールスベリー侯

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

英國内閣総理大臣オッグスホルド大學總長ソールスベリー侯

ソールスベリー侯爵ハ其名ヲ「ロベルト、セシル」ト云一千八百六十五年父君ニ継テ侯爵ニ列セラレ其翌年印度事務卿ニ任セラレ其後千八百七十四年ヨリ同七十八年迄ノ間再ヒ同職ニ就キ尋テ同八十年迄外務大臣トナリ其後千八百八十六年内閣総理大臣トナレリ少時オックスフォールド大學ニ學ヒ其後同大學總長ニ推薦セラレ今猶其職ニ在リ

小學教文雑誌第二百六十四号附録
明治廿年八月十日発行
東京日本橋區馬喰町二丁目一番地 興文社
持主兼印刷人 池部活三
編輯人 鹿島長二郎

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

又近來は家屋、室內飾付、食物の改良論盛なりと雖とも是決して容易のヿに非ず他の改良に異なりて金錢を要するの一條なれば熱心の改良論者と雖とも幾分か躊躇なき能はず此困難を幾分か減却せんには婦女の服を洋裝に改むるに若くなし現今の日本服は唯日本の家屋舊來の生活法に適せり故に一旦洋服を採用するに至らば其夫たる者は已むを得ず早速家屋の改良に取掛るべし家屋已に洋風とならば起居坐作より夫婦間の家內の交際も自然と洋風を採用するに至るべし婦人も亦洋服に對しても已れの位置を高め社會の改良の一人たるヿを力むるに至るべし然し是獨り婦人の服に限らず男子に於けるも亦然り日本中以上の男子の服は洋服に比すれば外見も立派に着心地も善く且つ費用も少しと雖とも獨り懶惰の人間に適して中々當時歐米風の繁劇の事務に與る人には活潑の動作を妨げて不都合極りなし加之今日の如く日本人が洋服を着するに至りしは其理由あり抑も吾輩西洋人の尤も日本人をして強き感觸を惹起すものは何事なるかと問ふに恐らくは吾輩西洋人は彼等を劣等なる人種なりと昇下するとの念に過るもの無るべし實に西洋人は一般に上貴族より下一個の仕立職に至るまで皆一種東洋人にしては別種の感情を有する者の如し日く東洋人は均しく上帝の創造せしものには相違なかるべけれども如何なる理由か一層劣等の位置に墜下せられたり故に之に接するも亦宜しく其心して可なりすと一個の念慮は日本の愛國者が西洋人の腦中より除去らんと努力する處なり彼等は此目的を遂せん爲めには自巳の固有のものと雖とも之を犧牲として毫も顧慮せざる決心を有せり偖衣服者頗る此一事に關係あり日本の男子にして依然として舊來の長袖を穿ち居らば判然と東洋人たる看板を揭くる故均しく外人を交際するも何となく幅のきかぬ心地せられ外人も之を見る亦東洋人なりと一目の下に昇下する傾向あり然るに歐州流行の服裝を以て外人の前に出づれは大に東西の區別を滅らげ洋人の取扱も自然異なるが如しと此思考は日本の男子が洋服を採用するに至りし重なる原因なり又現今日本上流社會の婦人か自己特有の容姿に適し優美なりとして外人の稱賛する日本服を脫し去りて洋服に改良するもの多きも蓋し專ら之あるが爲なりと日本已に基督教國の內に列せんヿを渴望す其婦女が基督教國姉妹の服制を模倣するに至りしは決して怪しむべきヿに非るなり若し以上の風說にして眞ならば伊藤伯か　皇后陛下及其官女等に洋服を採用せんヿを勸誘せられたるは唯歐米の事物なるを以て無暗矢鱈に採用せられたるには非ずして東西の區別を減却し內外の交際を圓滑にせんとの高尙なる目的に出でしものなり伯以爲らく我日本をして西洋諸國と對等の位置に立たしめんには將來日本の家內或は公私の交際に行はるゝ風俗慣習を一變せざる可らず此家內生活方より婦女の教育位地、社會交際に一大改良を施すに方り最も上策は文明國の模範を其儘採用するに在りとて偖コソ今日の如く遠慮會釋なく西洋の事物を採用し彼の衣服家屋食物婦女子教育の改良より夜會踏舞の頻繁なる皆此一個の策略を實行する手段に外ならず而して此等の改良にして多少政府の獎勵誘導に出でざるものなし以上今日まで日本人か採用したる方法は悉く非難すべからざるものなるや我は一般に布及すべきものなるや果して所謂其目的を遂し得べきにや就ては人々多く意見の異同あるべし余は日本メール記者を同意にて女服改良に關しては現今日本服に改良を加へハーバルトン夫人などが會を起し資を集めて頻に排斥に盡力せらる歐米服裝の弊害ある部分を除き衛生上經濟上不利益なる部分を改良し之に折衷するに日本舊服の長所を以てして一種の服制を案出せば可ならんか又少數富貴の人を除き一般社會の水平に位する人のポケットは果して洋服或は其の附屬間の需要に應するに足るかは少しく余の疑念なき能はざる所なれども兎も角日本人の近來改良に熱心なるは賀嘆して措く能はざる所なり

●新報

○女子敎育に關する森大臣の意見　同大臣は此程或人に向て物語られしと云ふを聞くに方今府縣師範學校の內にもまだ女子部を成さゝるもの數多ありこれは一日も早く完成し女敎師養成に着手したきものと思はる抑々女子は兒童を撫育するに天賦の長技ありて萬事に親切なる注意の周到なるは決して男敎員の及ぶ所に非ず殊に其幼稚兒童を敎育するは男子を用ふるに優ると萬々なりとは實に歐米にても通論となり居れりと聞く故に將來は尋常小學の敎育を擧て悉く女子に委するも不可なしと認むるものにして今日之が養成に心を用ふるは誠に急務なりと信ぜり是れ女子の學力薄弱なりとして然るにあらす唯一に幼稚者敎育の至難至重なるに女子の長技を應用せんとするが故のみ故ニ目下其人に乏しくんば宜しく適宜の法を以て假に其務に服せしむべき云々なりとか

○養育院慈善會　本年五月に鹿鳴舘に於て開會なりし同會は意外の好結果を得總收入金は一萬八十五圓七十四錢七厘にして其內より補充物品買上げの原價及び諸入費を引去り全くの收益金六千五百六十一圓五十六錢五厘の巨額に至たり右益金は該會長高崎男爵夫人より澁澤養育院長へ宛で同院原資に組入れ相成たき旨を以て此程悉皆引繼相成たりと

○女學叢誌　は我が女學雜誌の愛友なりしが此度何故にや東京敎育社發行の貴女の友ふて雜誌に合併せられたり吾人は該社雜誌の爲め則ち我が愛友の爲め賀すべきか亦は弔ふべきか自ら知る能はざるなり

○跡見女學校　全校は明治八年に創立し爾來十三箇年の間上流社會の貴女達の薰陶に從事せしか近來女子敎育の益盛んなるにつき追々校舍の陜隘を告げしより今度新ニ小石川區柳町に二千餘坪の地所を買入れ宏壯なる校舍を建築する由にて其建築費は凡そ二萬圓餘の豫算なりといふ

○松山高等女學校　同校は今度規摸を擴張し英語敎師には洋人を雇入るゝの計畫ありとされはにや來九月が生徒の入校期なるも今より陸續入校を志願するものありと云ふ

○京都看病婦學校　同學校は今度上京十七組龍岡町六百二番地、六百一番地、六百番地、同組元淸淨華院町五百八十六番地、六百八十五番地六百八十四番地、六百八十二番地、同淸和院町五百五十二番地此坪數合せて六百八十三坪七合を買得し寄附金

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

三千三百八十圓を以て校舍を新築し校長以下無給料として生徒は當分三十名を限りて開設致し度旨去る六日新島襄中村榮助の兩氏より京都府へ出願せり尙同校長は米國人エル、ゼー、リッチヤルド氏、敎員ハ ゼー、シー、ベルリー氏エス、シー、バックレー氏其他日本人數名なりと云ふ

○女子手藝會　攝州川邊郡尾崎の常照寺に於て有志婦人が主唱となり標題の如き會を設け和洋服裁縫、毛糸編物、英語其他挿花、茶道等を敎授する目的にて去る一日其開會式を執行せりと云ふ

●海外の女事

○女の裝飾家　米國のマリーチルリングハスト孃と云へるは裝飾藝の事に關して は尤も有名の人なるが著名の金滿家マンデルビルト氏は嘗て孃に委託して家内の 掛衣を注文し何か新き工夫を爲されたしとの委賴にて金三萬弗を拂ひたりとぞ

○裁判醫學敎授　エリサベス、スミス、ショルット夫人はキングストン醫學校最初の卒業生の一人なるが此度同所女子醫學校に於て裁判醫學及び衛生學の敎授に選擧されたり

○大學入校志願女子　米國ウエルスレー大學の校長アリスフリーマン孃の言によるに次年同大學へ入校を志願せる女子五百八十人ありとぞ尤も現今入學を許し得べきは只だ一百人の定所あるのみとぞ云へり

○クレブランド孃　米國大統領の令孃クレブランド孃は此度マルタ、ジー、ラムブ夫人と共同して米國歷史雜誌の編輯に着手あらんとするよし

○女子討論會　英國倫敦なる大學女生徒討論會の例會を六月八日に開きたるがアンナスワンウイック孃は劇場の道德感化力遊樂何如んと云へるとについて立派なる論文を讀上げ其の効能大なるとを主張したるが引續てロウトレッヂ孃グリーン孃クラーク夫人パウル孃等熱心に討論ありぬ

○女子大學生　露國の女子大學生は近來大に增加し昨年露國の大學校に於ける女學生の數は七百七十九人の多きに及びたり此內二百四十三人は原語學科に五百三十六人は數學科に屬し又七百四十八人は未婚の者にして三十一人は既婚の者なり此等の女學生は多くは貴族及文武官吏の女子に數て其數四百三十七人僧侶の女子は八十四人、商賈の女子は百二十五人、市民の女子は百十七人、農家の女子は十八人、兵卒の女子は四人、外國人へ二人なり此外尙露國の婦女にして外國殊に瑞西の大學校に於て勉學する者甚た多しと云ふ(本年六月四日獨逸アルヂマイ子、ツアイツンク)(本月四日官報)

●本誌に女學雜誌第七卷總目錄を附す目錄中新報の如き搜索に便ならんが爲め女學校の記事婦人會の新設など悉く一所に蒐集したれば町數の不順なる所ありかつ紙數限りありて新報中肝要の物のみ專ら揭載せり

●幣社の岩本善治去る十一日相州箱根へ避暑の爲め出發せり尤も二週間ほど滯在の心算なり

特別廣告

東京婦人矯風會員姓名宿所表　明治二十年七月調

麹町區の部

中六番町二十八番地櫻井女學校	矢島かち
中六番町三十一番地	島田まさ
下二番町十二番地	奥村みき
同	同　操
中六番町五十三番地	手島かね
飯田町四丁目二十一番地	眞木きつ
五番町一番地	井石滿江
三番町十九番地	村岡くの
中六番町五十二番地	出口せい
飯田町明治女學校	石川ろく
上二番町十九番地	三好壽代
同	森　とな
下二番町二十一番地	高平元
麹町五丁目三番地佐藤方	小池民
中六番町二十二番地	丸岡菊
平川町九丁目十五番地	坂田
上二番町二十六番地	長松
下六番町三番地	内藤順
同　櫻井女學校	岡田美壽
同　同	池田子尾
同　同	美甘光子

廣告

速記叢書 講談演説集

●第一冊 明治十九年七月十五日發行 明治二十年一月廿八日再版

○漢字やぶり　外山正一君

○地球の位置　寺尾壽君

○節酒會を賛成するの趣意　杉亨二君

○社會外に道徳なし　加藤弘之君

●第二冊 明治十九年十月十五日發行

○假名世界の準備　近藤眞琴君

○半開化は衛生の害　渡邊鼎君

○帝國の司法制度を説き併せて所感を述ぶ　三好退藏君

○法律と經濟との關係　細川潤次郎君

○基督教は社會進歩の爲めに必要なり　フルベッキ君

●第三冊 明治十九年十二月四日發行

○ノルマントン號船長の罪を鳴らさんとせば宜しく先づ證據蒐集に盡力すべし　藤堀正邦君

○眞正の改良　高田早苗君

○ノルマントン號沈沒事件を論ず　大谷木備一郎君

●第四冊 明治二十年四月九日發行

○人類的の慾をして動物的の慾を制せしむべし　加藤弘之君

○飲酒より生ずる弊害を調査するの方法を論ず　杉亨二君

○神學卒業生の心得　フルベッキ君

○日本小説改良論　關直彦君

○行政法大意第一回　宇川盛三郎君

●第五冊 明治二十年四月九日發行

○學問と宗教との關係を論ず　原坦山君

○飲酒の害　中村正直君

○我が日本帝國人民の將來を知するの說及其方法　杉亨二君

○基督教と婦人の地位　井深梶之助君

○行政法大意第二回　宇川盛三郎君

●第六冊 明治二十年八月一日發行

○彗星の話　寺尾壽君

○小説と演劇との關係　小中村清矩君

○行政法大意第三回　宇川盛三郎君

○專修學校生徒卒業式祝辭　加藤弘之君

（毎册定價金十二錢郵税四錢○但第三册ニ限リ定價金六錢郵税二錢）

發賣書肆

東京日本橋區通三丁目十四番地　丸善商社書店

東京日本橋區本町三丁目廿番地　瑞穂屋卯三郎

東京日本橋區馬喰町二丁目一番地　石川教育書房

東京神田區淡路町一丁目一番地　巖巖堂

●教育時論第八十三號

明治二十年八月五日發兌（毎月三回五ノ日ニ發兌）

社說●杞憂論○教育教育哲學（翔夷六郎譯）○小學教師ノ地位ヲ高尚ナラシムルノ策（渡邊嘉重稿）○現在ノ教員ヲ養成セヨ（佐藤熊之助）○教授原論（西村正三郎）●理科日蝕の話寫眞石版鮮明闘入（寺尾壽演述）●文藝かあぶんのかきかたをしんぱさする一つのてだて（したやとをる）●唱歌三節●奔走教育家來間弼藤太君傳（ゐ、ひ、）●教育小說○みさをのしがらみ（む、い、）內外雜纂凡三十件

（此外哲學ノ欄ヲ設ケテ内外諸大家ノ論說ヲ掲載スルコトアリ）

定價一覽表

冊數	代價	前郵税	金合計
一冊	五錢	一錢	六錢
十冊	四十八錢	十錢	五十八錢
二十冊	九十錢	二十錢	一圓十錢

本誌ハ全國教育家ノ賛助ヲ得テ有力ナル賛友ノ多キコト全國ニ冠タル雜誌ニシテ其目的ハ理學的ノ教育ヲ勸メ實業教育ノ法案ヲ極メ開發教授ヲ行フニ必要ナル諸學科ノ知識ヲ普及スルニアリ右ノ如クニ御座候間本誌ヲ御覽下サレ候ハバ一擧シテ教育上學問上ノ景況ニ通ジ且文藝ノ趣味ヲ味フノ種ニモ相成誠ニ有益ナルコト此上無キコトト存候

東京下谷區練塀町十四番地

發兌所　開發社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

いらつめ

本誌の目的は女子の智德を養成し外は社會の交際を圓滑ならしめ内は家を整理するの方法を得せしむるにあり〇八月十三日第二號發兌〇目次〇いらつめ内女子の地位を高むるに付ての注意〇月報數件〇姫かがみ風琴調の一節〇家政要錄金錢の性質雞卵料理法、牛肉鑑別法、飲炊改良法〇雜錄頭髮を長くする法、束髮の評判、迷の淵長歌唱歌等〇論說如何にして女子の地位を高むべきか第一高等中學校教諭井上十吉君女子諸君に望む高等師範學校助教諭上野錄子君〇餘興謎西洋手品等〇寄書いらつめ記者に望む石橋兩香〇美しき插畫入り〇每月第二土曜日發兌〇定價一冊八錢六冊前金四十五錢十二冊前金八十錢府外は郵税申受く

發行所 東京本郷區湯島天神町一丁目五十九番地 **成美社**

大賣捌所 同神田雉子町三十二番地 **團々社支店**

新書出板廣告

〇森本介石君編纂
試心發表
悔改結果 **奇集談** 定價堅表紙三十三錢假綴二十七錢代金は必ず前金

發行所東京新橋日吉町二十番地警醒社

發兌

八月。六日 十三日 二十日 廿七日
九月。三日 十日 十七日 廿四日
十月。一日 八日 十五日 廿二日 廿九日
十一月。五日 十二日 十九日 廿六日

定價

一册。五錢 郵税。一錢 (但府内無郵税)
十册。四十八錢郵税。十錢 (同前)
半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢
一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する場合には右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部増の割合と定む

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引
但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂〇東京芝西久保櫻川町萬春堂〇東京神田區雉子町團々社支店〇同神田區佐柄木町東海堂〇同日本橋區新銀町良明堂〇同京橋區木挽町壹丁目萬字堂〇同本郷元富士町盛春堂〇同本郷區春木町二丁目解明堂〇東京本郷四丁目文壽堂〇橫濱伴吉町角田屋貞〇京都四條通小橋東へ入澤集光堂〇同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード〇大坂備後町四丁目岡島支店〇仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部〇宮城縣仙臺大町木村文助〇尾張國名古屋本町石版舍〇出雲國松江新町盛進堂〇廣島縣大手町一丁目早速社〇長崎酒屋町虎與號〇江州彥根西内大工町新々堂〇相州小田原緑町石壽堂〇上州高崎田町煥平堂〇勢州松坂家里初枝

發行所 東京京橋區日吉町八番地 本局 **女學雜誌社**

持主兼編輯 巖本善治
印刷 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office. No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tōkyō, Japan.